世說新語　顏氏家訓

I242
J14

220
中国
文学
412

I242
J14

京都大学図書
1820103764
人環・総人図書館

日文 701601757

中国古典文学大系 9

世説新語

劉義慶 著　森三樹三郎 訳

顔氏家訓

顔之推 著　宇都宮清吉 訳

平凡社

東京大学東洋文化研究所
藏書

抹消
京都大学総合図書館
1990059

412
264
c.920

訳者紹介

森三樹三郎　1909年京都府生。京都大学文学部卒。仏教大学教授。専攻　中国哲学。主訳著　『支那古代神話』（大雅堂）『梁の武帝』（平楽寺書店）『荘子』（中央公論社「世界の名著」）『無の思想』『名と恥の文化』（講談社）　現住所　京都市北区大将軍坂田町6

宇都宮清吉　1905年愛知県生。京都大学文学部卒。名古屋大学名誉教授。専攻　東洋史。主著　『漢代社会経済史研究』（弘文堂）　主訳書　武仙卿著『魏晋南北朝経済史』（生活社）　現住所　京都市左京区鹿ヶ谷寺ノ前町8

中国古典文学大系　全60巻

世説新語　顔氏家訓　　第9巻

昭和44年4月12日　初版第1刷発行
昭和48年7月1日　初版第2刷発行　　定価 1900円

訳者との申合せにより検印を省略いたします

訳者　森三樹三郎　宇都宮清吉

発行者　東京都千代田区四番町4番地　下中邦彦

発行所　郵便番号 102　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京29639　株式会社　平凡社

落丁・乱丁本はお取替えいたします　　印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社石津製本所

© 株式会社　平凡社　1969

0398-312091-7600

目次

世説新語

上巻

徳行篇　第一　(一―四七)……三
言語篇　第二　(一―一〇八)……二〇
政事篇　第三　(一―二六)……六三
文学篇　第四　(一―一〇四)……七三

中巻

方正篇　第五　(一―六六)……一〇八
雅量篇　第六　(一―四二)……一三四
識鑒篇　第七　(一―二八)……一四九
賞誉篇　第八　(一―一五六)……一六〇
品藻篇　第九　(一―八八)……二〇〇
規箴篇　第十　(一―二七)……二二七
捷悟篇　第十一　(一―七)……二三七
夙惠篇　第十二　(一―七)……二四一
豪爽篇　第十三　(一―一三)……二四四

下巻

容止篇　第十四　(一―三九)……二四八
自新篇　第十五　(一―一二)……二五八
企羨篇　第十六　(一―六)……二六〇
傷逝篇　第十七　(一―一九)……二六二
棲逸篇　第十八　(一―一七)……二六八
賢媛篇　第十九　(一―三二)……二七三
術解篇　第二十　(一―一二)……二八六
巧芸篇　第二十一　(一―一四)……二九〇
寵礼篇　第二十二　(一―六)……二九四
任誕篇　第二十三　(一―五四)……二九六
簡傲篇　第二十四　(一―一七)……三二三
排調篇　第二十五　(一―六五)……三三〇
軽詆篇　第二十六　(一―三三)……三四三
仮譎篇　第二十七　(一―一四)……三五四
黜免篇　第二十八　(一―九)……三六〇
俊爽篇　第二十九　(一―九)……三六三
汰侈篇　第三十　(一―一二)……三六五

忿狷篇　第三十一（一―〇）……三七〇
讒険篇　第三十二（一―四）……三七三
尤悔篇　第三十三（一―七）……三七四
紕漏篇　第三十四（一―〇）……三八〇
惑溺篇　第三十五（一―七）……三八四
仇隙篇　第三十六（一―〇）……三八七
世説新語　人名索引……三九一

顔氏家訓

第一章　主　旨（序致第一）

一　何故こんなものを書くか……四〇三
二　私の生いたちに寄せて……四〇三

第二章　子弟の教育（教子第二）

三　子弟の教育は早く始める程よい……四〇七
四　躾に鞭はつきものだ……四〇八
五　王僧辯の母とある秀才学士の父……四〇八
六　父子の関係と礼……四〇九
七　斉の琅邪王殿下……四一〇
八　偏愛の恐ろしさ……四一一
九　おかしな子弟教育……四一一

第三章　兄弟論（兄弟第三）

一〇　兄弟の間柄……四一二
一一　兄弟と他人……四一三
一二　兄弟が不和だと……四一三
一三　いざこざの震源地……四一三
一四　父子愛と兄弟愛……四一四
一五　礼儀正しい弟の話……四一四
一六　三兄弟の美しい愛情……四一四

第四章　再婚論（後娶第四）

一七　再婚の生んだ悲劇は無数だ……四一五
一八　再婚と家族内の争い……四一五
一九　連れ子と生さぬ子……四一六
二〇　継母の立場も考えて上げねば……四一七
二一　『後漢書』からの抜書き……四一七

第五章　家政論（治家第五）

二二　家族間の道義の在り方……四一八
二三　家政と国政……四一八
二四　倹約と吝……四一八
二五　生産と生活……四一九
二六　家政厳格の悲劇……四一九
二七　のほほんの過ち……四一九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二八　寛容な主人……四二〇
二九　清貧な生活……四二〇
三〇　貪欲な近衛司令官……四二〇
三一　吝ん坊の分限者……四二一
三二　かかあ天下にしてはいけない……四二一
三三　女性の南北差（其の一）……四二一
三四　女性の南北差（其の二）……四二三
三五　女性の南北差（其の三）……四二三
三六　女の子が多いのを嫌う習慣……四二四
三七　姑は小言を菜に飯を食い……四二四
三八　嫁取りは似たり八合のこと……四二五
三九　書物借用の心得……四二五
四〇　迷信にまような……四二六

第六章　みだしなみ論（風操第六）

四一　士大夫のみだしなみ……四二七
四二　諱について（其の一）――タブーの守り方……四二七
四三　諱について（其の二）――非常識な避諱法……四二八
四四　諱について（其の三）――諱字を避けるには……四二八
四五　命名法（其の一）――正常さを保て……四二九
四六　命名法（其の二）――好ましくない命名……四三〇
四七　命名法（其の三）――子孫の立場も考えよ……四三〇
四八　命名法（其の四）――こんなのも好もしくない……四三一
四九　畜生呼ばわり……四三一
五〇　ユーモア……四三二
五一　親族の呼称法（其の一）――「家の」について……四三二
五二　親族の呼称法（其の二）――会話・手紙文の時……四三三
五三　弔慰と送迎……四三三
五四　一人称について……四三四
五五　故人の呼称法――先代の場合、その他……四三四
五六　伯・叔・姪の呼称……四三五
五七　別離の涙……四三六
五八　再び親族の呼称法（其の一）――呼称の修飾語……四三七
五九　再び親族の呼称法（其の二）――一族の互称法……四三七
六〇　再び親族の呼称法（其の三）――女性の呼称……四三八
六一　祖公という呼称……四三八
六二　諱と字……四三九
六三　哭について……四三九
六四　弔問……四四〇
六五　辰の日のタブー……四四〇
六六　死霊の迷信……四四一
六七　孤の追悼生活（其の一）――元旦と夏至……四四一
六八　孤の追悼生活（其の二）――梁代の除服出仕……四四一
六九　孤の追悼生活（其の三）――謹慎の仕方について……四四二
七〇　孤の追悼生活（其の四）――両親の遺品……四四三
七一　亡き母を慕う幼女……四四三
七二　親の命日（其の一）――礼の真意に即せよ……四四三
七三　親の命日（其の二）――命日以外の諱み日……四四四
七四　諱字の避け方……四四四
七五　疎忽のお笑い……四四五
七六　誕生日の行事……四四五
七七　「痛い！」という語……四四六

六八　弾劾された者の子弟……四四六
六九　戦争と家族……四四七
七〇　父母重篤の時……四四七
七一　義兄弟の契り……四四八
七二　お客の接待……四四八

第七章　良友・達人論（慕賢第七）

七三　友を択ぶこと……四四九
七四　東隣りの丘という男……四五〇
七五　他人の美をぬすむな……四五一
七六　丁覘の思い出……四五一
七七　器量の開き……四五二
七八　国の存亡を担う名臣……四五三
七九　偉大な一助役の事績……四五四

第八章　学問論（勉学第八）

八〇　勉学は誰にも必要なもの……四五五
八一　梁朝全盛期の貴族ども……四五六
八二　学は身を助く……四五七
八三　読書の功徳……四五七
八四　学を貴ぶの論……四五九
八五　浅見は読書で深められる……四五九
八六　読書と学問の目的……四六一
八七　学問などしないがまし……四六四
八八　己のためにする学問……四六四
八九　学問は育種と似ている……四六四
九〇　晩学のすすめ……四六五
九一　勉学の方法……四六六
九二　儒者どもの固陋性……四六八
(I)　文集とは？……四六八
(II)　魏収の腹立ち……四六九
九三　老荘学所見……四七〇
九四　折角の孝行も無教養では……四七四
九五　元帝さまの御勉強ぶり……四七五
九六　苦学した人々……四七五
九七　学問で人間になった蛮童……四七六
九八　長子思魯に示す学問論……四七七
九九　独りよがりはいけない……四七八
(I)　孟労珍説……四七八
(II)　堂々たるかな張や！……四七八
(III)　芋と羊……四七九
(IV)　顧頊の音……四七九
(V)　王莽の容貌……四七九
(VI)　撞胴奇説……四七九
(VII)　枝と杖・歴と磨……四八〇
一〇〇　耳学問を頼りにするな……四八一
一〇一　文字学は典籍理解の根本……四八三
一〇二　無関心な文字使用法……四八四
一〇三　私の文字研究例（其の一）——猟閭と亢（方？）仇……四八五
一〇四　私の文字研究例（其の二）——蜮……四八五
一〇五　私の文字研究例（其の三）——洎……四八六
一〇六　私の文字研究例（其の四）——勿勿……四八六

一一七　私の文字研究例（其の五）――豆逼……四八六
一一八　私の文字研究例（其の六）――鳩……四八七
一一九　教養の浅いは致し方ないもの……四八七
一二〇　文字には平素の注意が肝心……四八八
一二一　文字の校訂……四八九

第九章　文章論（文章第九）

一二二　作家の落とし穴……四九〇
一二三　馬鹿者大売出しのビラ……四九四
一二四　文章を発表するには……四九五
一二五　作家の苦患……四九五
一二六　揚雄論……四九六
一二七　花と寒木……四九八
一二八　文章制作法（其の一）――制禦……四九八
一二九　文章制作法（其の二）――その根本と枝葉……四九八
一三〇　文章制作法（其の三）――構想と修辞……四九九
一三一　先代の遺作について……四九九
一三二　沈約の作文法――三つの「易い」……五〇〇
一三三　邢子才と魏収……五〇一
一三四　文章制作で避けたい用語（其の一）――不祥語……五〇一
一三五　文章制作で避けたい用語（其の二）――古典乱用……五〇三
一三六　文章制作で避けたい用語（其の三）――反語注意……五〇三
一三七　文章制作で避けたい用語（其の四）――再び古典乱用……五〇四
一三八　文章の批評について……五〇四
一三九　古文今評……五〇五
一四〇　陸詩短評（其の一）――挽歌の形式……五〇七
一四一　陸詩短評（其の二）――形式の混乱……五〇七
一四二　古典の誤引について……五〇八
(I)　雛くと鷹く……五〇八
(II)　孔懐……五〇八
(III)　魚と蟹……五〇八
(IV)　鳥か烏か……五〇八
(V)　故事のとりちがえ……五〇八
(VI)　銀と銀……五〇九
一四三　文章と地理……五一〇
一四四　名句の鑑賞（其の一）――王籍作「若耶溪に入るの詩」……五一〇
一四五　名句の鑑賞（其の二）――蕭慤作「秋詩」……五一一
一四六　名句の鑑賞（其の三）――何詩劉評。其の他……五一一

第十章　名声論（名実第十）

一四七　名と実、形と影……五一三
一四八　余地論……五一三
一四九　人の真贋は必ず判る……五一四
一五〇　虚名を追う男……五一五
一五一　子弟の作文添削……五一六
一五二　贋サービスは後が続かぬ……五一六
一五三　名声について……五一七

第十一章　実践論（渉務第十一）

一五四　職務と能力……五一八

一三五　無能な南朝士大夫層……一三九
一三六　梁代の士大夫……一三〇
一三七　苦労知らずの南朝士大夫……一三〇

第十二章　専心論（省事第十二）

一三八　下手の横好き……一三一
一三九　政見の上申……一三三
一四〇　職分を越えないこと……一三三
一四一　昇進について……一三四
一四二　狂躁と静観……一三四
一四三　斉朝時代の末期……一三五
一四四　熱腹と冷腸の説……一三六
一四五　つまらぬ名誉心……一三七

第十三章　八分目論（止足第十三）

一四六　靖侯さまの教え……一三八
一四七　経済生活について……一三九
一四八　引退の潮時……一三九

第十四章　兵事不関与論（誡兵第十四）

一四九　歴世の顔姓と兵事……一四〇
一五〇　孔子さまは大力の持ち主だったが……一四一
一五一　君子と兵事……一四二
一五二　飯袋・酒がめの類でしかない……一四三

第十五章　養生論（養生第十五）

一五三　長生術について……一四三
一五四　薬餌法について……一四四
一五五　命あってこその養生だ……一四四
一五六　死に方について……一四五

第十六章　帰依論（帰心第十六）

一五七　序論……一四六
一五八　仏教とは何か……一四六
一五九　誤解された仏教に対する弁明……一四七
　釈明の一　教説はでたらめか　否！……一四八
　(I)　大宇宙と人間の臆測……一四八
　(II)　霊妙不可思議について……一四〇
　釈明の二　因果応報説はペテンか　否！……一四三
　釈明の三　僧尼はいかさまの存在か　否！……一四一
　釈明の四　仏徒は国家に損害を与えるか　否！……一四二
　釈明の五　後世は信じられないか　否！……一四三
一六〇　不殺生の戒について……一四四
　不殺生の戒は守って欲しい……一四四
　(I)　卵白で髪を洗った男……一四五
　(II)　鱔糞売りの商人……一四五
　(III)　羊のたたり……一四五
　(IV)　牛のたたり……一四五
　(V)　虐刑のむくい……一四六
　(VI)　再び牛のたたり……一四六

(Ⅷ) 魚のたたり……一五四六
一八一 嫁いびり……一五四六

第十七章　経史文字覚書集（書証第十七）

一八二 荇菜について……一五四七
一八三 苦荼について……一五四七
一八四 杕杜篇の杕について……一五四八
一八五 魯頌の牡字について……一五四八
一八六 荔について……一五四九
一八七 施施について……一五五〇
一八八 詩句「興雲祁祁」について……一五五〇
一八九 猶豫・狐疑考……一五五〇
一九〇 咳について……一五五一
一九一 景字について……一五五二
一九二 陳字について……一五五二
一九三 叢字について……一五五三
一九四 也字について……一五五三
一九五 蜀才なる人物について……一五五四
一九六 撙字について……一五五五
一九七 冐字について……一五五五
一九八 王莽の容貌についてのお笑い草……一五五六
一九九 策字について、及び其の他……一五五六
二〇〇 慮と宓と伏……一五五七
二〇一 雞口・牛後について……一五五八
二〇二 伎癢について……一五五八
二〇三 媚と娼と妬……一五五九
二〇四 新得資料で『史記』の文を訂正す……一五五九
二〇五 禔字について……一五六〇
二〇六 省中と禁中……一五六一
二〇七 小侯考……一五六一
二〇八 鱓と鱣……一五六二
二〇九 虎穴……一五六三
二一〇 柿という文字……一五六三
二一一 果と顆……一五六四
二一二 効字について……一五六五
二一三 酪伯について……一五六五
二一四 楽府の文句（其の一）――三婦（三人のよめ）……一五六六
二一五 楽府の文句（其の二）――扊扅……一五六七
二一六 『通俗文』とその著者服虔……一五六八
二一七 古書と後人の書きこみ……一五六八
二一八 『東宮旧事』の癖（其の一）――呉訛り……一五七〇
二一九 『東宮旧事』の癖（其の二）――緹……一五七一
二二〇 趙州荘厳寺碑銘余談……一五七一
二二一 五更について……一五七二
二二二 朮について……一五七三
二二三 郭禿劇（郭の禿ちゃん芝居）……一五七三
二二四 治獄参軍を長流参軍と謂うこと……一五七四
二二五 『説文』私論……一五七四
二二六 字体について（其の一）――字書と字体……一五七六
二二七 字体について（其の二）――問題外の字体論……一五七八
二二八 「日中必熭」の解釈について……一五七九

第十八章　音　韻　論（音辭第十八）
三二九　音韻研究史概説……五八〇
三三〇　南北方言音の相異……五八二
付(1)　北方の音韻学者……五八三
付(2)　我が家の言語教育……五八三
三三一　字音の誤りあれこれ……五八四
三三二　李季節君は字音のベテラン……五八五
三三三　同一文字の音韻・声調と字義……五八六
三三四　焉字について……五八七
三三五　助字の邪について……五八七
三三六『左伝』における「敗」の音と義……五八八
三三七　公達の言葉はなってない……五八八
三三八　音韻の誤りと避諱……五八九
第十九章　諸　芸　論（雑芸第十九）
三三九　書について……五九〇
三四〇　書の道を御得意芸などにするな……五九〇
三四一　王右軍は書風の源流……五九一
三四二　南北朝書法の傾向……五九二
三四三　画　書　賦……五九三
三四四　絵画の芸術について……五九三
三四五　弓術について……五九四
三四六　卜筮について……五九五
三四七　算術について……五九七
三四八　医薬の知識について……五九七
三四九　音楽について……五九七
三五〇　囲碁などの遊戯について……五九八
三五一　投　壺……六〇〇
第二十章　遺　言（終制第二十）
三五二(Ⅰ)　死について……六〇一
(Ⅱ)　先代のお墓について……六〇一
(Ⅲ)　我が家の置かれている立場……六〇二
(Ⅳ)　埋葬の方式について……六〇三
(Ⅴ)　仏事について……六〇四
(Ⅵ)　君子は現実的に生きるべきだ……六〇四

解　題

世説新語　森三樹三郎……六〇七
顔氏家訓　宇都宮清吉……六一五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世説新語

劉義慶 著
森三樹三郎 訳

上巻

徳行篇 第一

上巻は徳行、言語、政事、文学の四篇からなっているが、これは『論語』の先進篇に「徳行は顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語は宰我・子貢、政事は冉有・季路、文学は子游・子夏」という、いわゆる「四科」からとったものである。

一 陳仲挙[注一]は、その言葉は人びとの手本となり、その行ないは世の模範となっていた。地方官に任命されて車に乗り、手綱を握るとともに、天下を粛清しようとする志をいだいた。

豫章郡（江西省）の太守となり、到着するやいなや、徐孺子[注二]の家をたずね、何をさておいても面会しようとした。そこで、郡の主簿[注三]が申しあげた。

「一同は太守さまがとりあえず役所のうちに入ってくださるよう、お待ちしております」

すると、陳仲挙はいった。

「周の武王[注四]は、商容[注五]という賢人のすむ村にさしかかったとき、敬意を表するために車中に立ちあがったまま、席の温まるひまもなかったということだ。してみれば、私が賢者に敬意を表したとしても、何の不都合があろうか」

二 周子居[注一]は、いつも口ぐせのように言っていた。

「わしは数ヵ月も黄叔度[注二]に会わないでいると、いやしい心が、もうちゃんと生まれている」

注

一 陳仲挙 ?―一六八年。仲挙は字で、名は蕃。汝南郡平輿（河南省汝南県）の人。政界を乱す宦官と対立し、清流官人の指導者となり、太尉の官に任ぜられたが、宦官のために殺された。（『後漢書』九六）

二 徐孺子 孺子は字で、名は穉。豫章郡南昌の人。当時、徳行の高いことが天下に聞こえた。（『後漢書』八三）

三 郡の主簿 帳簿をつかさどる官で、庶務の主任。中央や地方の官庁におかれたが、郡の主簿は功曹とともに綱紀とよばれて、重要な職であった。

四 周の武王 文王についで周の王朝を建設した聖王として知られる。

五 商容 殷代の賢人で、老子の師であるという伝説がある。（『呂氏春秋』慎大覧篇）

一 周子居 子居は字、名は乗。汝南安城（河南省汝南県）の人。陳蕃の友人で、後漢の太山太守となった。

二 黄叔度 叔度は字、名は憲。汝南慎陽（河南省正陽県）の人。牛医の子に生まれたが、徳行高く、顔回の再来といわれた。

三 郭林宗が汝南（河南省）へ行ったとき、袁奉高[注一]の家を訪れた。そのときは乗ってきた車もろくにとめず、馬につけた鈴も鳴りやまないうちに、あたふたと辞去した。ところが黄叔度の家を訪れたときには、

いく日いく夜にもわたるありさまであった。ある人がそのわけをたずねると、郭林宗は答えた。

「黄叔度の人がらは、ひろびろとして、まるで万頃もある池のようだ。その水を澄ませうとしても澄まず、かきまわしても濁ることがない。その器量が深くてひろいのは、いくら測ろうとしても測りきれないよ」

注

一　郭林宗　一二八―六九年。林宗は字で、名は泰。太原界休（山西省介休県）の人。後漢末の宦官に対立した清流官人のあいだで絶大な人気があった。仕官せずに終わった。（『後漢書』九八）

二　寅奉高　奉高は字、名は閎。汝南（河南省）の人。黄叔度とは幼なじみで、郭林宗を官に推挙したことがあった。

三　万頃　頃は百畝のひろさ。

四　李元礼は風格がすぐれて、すきまのない人物であり、みずからを持することが高く、天下の名教を維持し、是非を正すことを、自分の任務としていた。後輩のうちで、かれの家の堂に登るものがあると、世間ではこれを竜門に登ったといった。

注

一　李元礼　一一〇―六九年。元礼は字で、名は膺。潁川（河南省）の人。後漢の官僚知識人の代表的人物で、宦官と争って殺された。（『後漢書』九七党錮伝）

二　名教　名分の教えの意味で、具体的には儒教をさす。この語は、このころから初めて用いられるようになった。

三　竜門に登った　「登竜門」という語の出典となる。竜門は、黄河上流の河津県（山西省）にあり、ここの激流を登ることのできた魚は竜となるという伝説があった。

五　李元礼は、あるとき荀淑と鍾皓との人柄を賛嘆していった。「荀君のりっぱな見識の上に出ることはむつかしいが、鍾君のすぐれた徳は、わが師とすることができる」

注

一　荀淑　八三―一四九年。字は季和。潁川（河南省）の人。後漢の朗陵侯相となる。李元礼と親交があり、宦官に対立した。（『後漢書』九二）

二　鍾皓　字は季明。潁川の人。名族の家に生まれたが、仕官しなかった。（『後漢書』九二）

＊　同じく人物をほめるのに、一方は「むつかしい」他方は「できる」という反対の表現を用いたところに、おもしろさがある。

六　陳太丘は荀朗陵をおとずれようとしたが、貧乏でお供をする下僕がいなかった。そこで長男の元方に車をひかせ、季方に杖をもって後に従わせ、長文はまだ幼いので車にのせた。

さて到着すると、こんどは荀朗陵が、その子の叔慈を門まで出迎えにやらせ、慈明に酒の酌をさせ、そのほかの六竜――六人の子には食事の給仕をさせたが、文若だけはまだ幼いので膝もとにすわらせた。

このとき朝廷では、太史（天文方）が「真人星が東に向かって移動しました」と上奏した。

注

一 陳太丘　一〇四―八七年。太丘は太丘県令で官名。名は寔、字は仲弓。潁川（河南省）の人。微賤の出身であるが、名望高く、宦官と争って捕えられた。（『後漢書』九二）

二 荀朗陵　前節に見える荀淑のこと。ここは官名でよんだ。

三 陳元方　元方は字で、名は紀。後漢末、董卓に仕えて侍中となる。父とともに名声があった。（『後漢書』九二）

四 陳季方　季方は字、名は諶。父や兄とともに名声があり、三君とよばれたが、若くて死んだ。（『後漢書』九二）

五 陳長文　?―二三六年。長文は字で、名は群。魏の司空録尚書事となる。政治の才にすぐれ、九品官人法の立案者として有名。（『三国志』魏志二二）

六 荀叔慈　叔慈は字、名は靖。仕官せず、玄行先生とよばれた。（『後漢書』九二）

七 荀慈明　慈明は字、名は爽。荀淑の第六子。後漢のとき郎中となり、のち董卓のもとに司空となる。（『後漢書』九二）

八 六竜　荀淑には八人のすぐれた子があり、世にこれを八竜とよんだが、そのうちの六人であるから、これを六竜といった。

九 荀文若　一六三―二一二年。文若は字、名は彧。荀淑の孫。後漢末、魏の曹操の腹心となり、侍中守尚書令となった。（『三国志』魏志一〇）

一〇 真人星が……移動しました　真人は、道家で道を体得した人間をいう。ただし、このばあいは星の名である。下界の大きな事件が、天文の異変となって現われるという思想があるが、都の洛陽の東方にあたる潁川の地に、多くのすぐれた人物すなわち真人が集合したために、天界の真人星が東に移動したというのである。

七　ある人が陳季方[注一]にたずねた。

「あなたの父君の陳太丘[注二]さんは、どのような功績や徳行があって、あのように天下の人びとから大きな名声を受けていられるのですか」

すると、季方は答えた。

「私の父は、たとえば桂の木が泰山の一角にある丘の上に生えているようなものです。上には泰山が万仞の高さにそびえ、下には測りしれない深さをもった淵が横たわり、梢のさきは甘露にうるおされ、下の根は淵の泉でうるおされています。このような場合に、桂の木は、どうして泰山の高さや、淵の泉の深さをうかがい知ることができましょうか。ですから、父も自分の功績や徳行のあるなしを知るよしもありません[注三]」

注

一 陳季方　前節に見える。

二 陳太丘　前節に見える。

三 桂の木は……　桂の木の上方にある泰山は天子をさし、その下方にある淵は庶民をさす。父は、上の天子、下の万民のおかげで名声を得たのであり、功績や徳行を意識するようなことはない。

八　陳元方の子の長文[注一]は、すぐれた才能をもっていた。あるとき陳季方の子の孝先[注二]と、めいめいの父の功績や徳行を論じあい、優劣を争ったけれども、決することができなかったので、祖父の陳太丘の意見を求めた。すると陳太丘はいった。

「元方を兄とすることはむつかしく、季方を弟とすることもむつかしい[注三]」

注

一 長文　陳群のこと。六節にみえる。

二 陳孝先　孝先は字、名は忠。六節にみえる季方の子。

三 元方を兄とする……　元方は兄、季方は弟であるが、徳行についてみれば上下をつけられないとの意。「兄たりがたく、弟たりがたし」という語の出典となる。

九　荀巨伯(注一)は、はるばる遠方から友人の病気見舞いにやってきた。ところが、ちょうどそのとき、胡の賊軍が友人のすむ郡に攻め入ってきた。その友人は荀巨伯に向かっていった。

「私は今にも死ぬ身だ。君はここを立ち去ってほしい」

すると荀巨伯は答えた。

「はるばる見舞いにきたのに、君はすぐ立ち去れというが、義をやぶって生きのびようとすることは、この荀巨伯には、とてもできないことだよ」

とうとう賊軍がやってきて、荀巨伯に向かって告げた。

「大軍がおしよせ、郡のうちには、すっかり人影もなくなっている。それなのに、ただひとりふみとどまるとは、いったいお前はどうした男だ」

荀巨伯は答えた。

「友人が病気で、すてて逃げるに忍びないのだよ。できれば、私の身と、友人の命とを、ひきかえにしてもらえないだろうか」

すると賊兵たちは、たがいに顔を見合わせていった。

「われわれは道義をわきまえない人間であるくせに、道義をそなえた人間の国に入りこんでしまったらしい」

そういって賊たちは軍をひきかえし、そのまま帰っていったので、郡全体が事なきを得たのであった。

注

一　荀巨伯　『荀氏家伝』に、後漢の桓帝の時の人で、潁川の出身であるが、詳細は不明であるという。

一〇　華歆は自分の子弟にたいする態度が、非常にきちんとしており、くつろいだ部屋の内でも、まるで朝廷の儀式のときのようにおごそかであった。反対に、陳元方の兄弟は、思いきりなごやかで、慈愛の気風につつまれていた。そのくせ、双方の家庭の内は、どちらも仲よく楽しむという道を失うことがなかった。

注

一　華歆　一五七―二三一年。字は子魚。平原（山東省）の人。魏の太尉となった。（『三国志』魏志一三）

二　陳元方の兄弟　六節の元方（陳紀）と季方（陳諶）をさす。

一一　管寧と華歆とが、いっしょに家の畑で鋤で耕し、野菜の手入れをしていたが、ふと土のなかに金のかけらがあるのを見つけた。管寧は目もくれずに鋤を動かし、瓦や石と区別をしなかったが、華歆は金のかけらをひろいあげ、投げすててしまった。

また、あるとき二人が同じ席の上で読書していたところ、りっぱな車にのり、礼冠をいただいた貴人が門前を通りかかった。管寧は読書をつづけてやめなかったが、華歆は読書をやめ、外に出て見物した。管寧は席をひきさいて、別々にすわり、そしていった。

「君は私の友ではない」

注

一　管寧　字は幼安。北海（山東省）の人。魏のとき、朝廷からたびたび召

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com